

Title	編集後記
Sub Title	
Author	奥田, 敦(Okuda, Atsushi)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2016
Jtitle	Keio SFC journal Vol.16, No.1 (2016. ) ,p.265- 265
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 東日本大震災からの復興と人口減少時代の国土のあり方
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0402-1601-0265">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0402-1601-0265</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 編集後記

最終校正のゲラを前に、実にふさわしい方に特集の担当編集委員をお願いできたと改めて感じている。子供時代を仙台市周辺で過ごし、その頃よく遊びに出かけていた地域が壊滅的被害に見舞われたという、一ノ瀬先生である。先生の並々ならぬ決意は、招待論文を含む特集の全論文の執筆者たちに共有されていて、何とかして一日も早い復興をというスタンスに特集論文は貫かれている。

いずれの論考も、問題を明らかにしながら、それぞれの専門的知見から解決方法を示してくれている。住民サイドの主体性の獲得の試みや IT の活用の進化にむけた取り組みなどに希望の光が見える一方で、少し気になるのは、オーストリアからの懸念にも明らかのように、共有すべき価値の部分の議論がやはり困難を極めるのだなということである。

「物理と社会」という見て確認できるレベルを超えて、あるいは、「科学の限界を乗り越えて命を守り切りたい」という切実な思いを受け止められる大きな受け皿についても探究を進めるべきであろうという課題が示されてもいる。

地震はこの世の終わりの兆候であると、理性を超えたところから発せられる声は伝えている。また、かつて、理性と技術に頼んで文明を築いた民族が一夜にして地震で押し潰されるといふ物語も、啓示の中には散見される。ハビタットロスの指摘は、この世を終末に追い込まないために、理性と技術の構築物に安易に押しつぶされないために何が必要なのかを示したものとも言える。

この震災が人災か天災かといえば、人災であるという指摘があったが、人の何が災いのもとになったのかはもちろんだが、人災としてそれを引き起こさせた天の意図は何なのかについてまで考察を広げたい。《人間の手が稼いだことのために、陸に海に荒廃がもう現われている。これは（アッラーが）、かれらの行ったことの一部を味わわせかれらを（悪から）戻らせるためである。》（聖典クルアーン、ピザンチン章 41 節）。自分たちが行ったことは何だったのか、そしてどこへ戻るべきなのかを、運動姿勢、タンパク質、昆虫の話題を含め本号が考えるきっかけになればと思う。

奥田 敦

KEIO SFC JOURNAL 編集長